

# 霊宝館だより

題字・奮野光義師

霊宝館だより 第93号

平成21年11月1日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話 0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>



『高野大師行状図画』(地藏院) 巻二「天狗降伏」より

弘法大師と問答するため、遅ればせにやって来た天狗

## 秋期企画展

### 「山岳信仰と高野山」

開催中

12月13日(日)まで

「関西文化の日」に協賛し、平成21年11月2日(月)を無料拝観日といたします。

### 「高野山の道」

フォトコンテスト作品募集

応募期間

11月1日～11月30日(当日消印有効)

第四回を迎えます高野山霊宝館もみじ祭フォトコンテスト、今回は世界遺産登録五周年を記念し、「高野山の道」をテーマに作品を募集いたします。高野山で撮影した「道」のある写真をお待ちしております。ふるってご応募ください。

ご応募・お問い合わせ先

〒648-0211

和歌山県伊都郡高野町高野山306

高野山霊宝館内「もみじ祭」係

電話 0736-56-2029

秋期企画展

# 山岳信仰と高野山

## 12月13日(日)まで

秋期企画展「山岳信仰と高野山」が10月3日に開幕いたしました。

今回の展示は、日本山岳修験学会第30回記念高野山学術大会実行委員会との共催です。高野山の地主神である丹生明神の鎮座する山麓天野や、葛城、大峯など周辺の山岳地帯との関係性を含め、神仏のおわします山岳信仰の聖地・高野山の側面に光を当てようとするものです。

### 【主な出陳品】

#### ＜重要文化財＞

丹生明神像・狩場明神像 金剛峯寺※

狩場明神像 竜光院

弘法大師丹生高野両明神像（問答講本尊） 金剛峯寺※

#### ＜未指定＞

高野山絵図 持明院

弘法大師四社明神像 桜池院

四社明神像 正智院

四社明神像 金剛峯寺

性霊集第一巻・第九巻 三宝院

（高野山大学図書館）



役行者倚像 金剛峯寺女人堂

- 高野雑日記 金剛峯寺
- 金剛峯寺建立修行縁起 三宝院
- 葛城先達峯中勤式廻行記 真別所 (高野山大学図書館)
- 天野両法会雜記 真別所 (高野山大学図書館)
- 高野山参詣絵図 延宝年間本 (高野山大学図書館)
- 三社託宣 有志八幡講
- 弓箭・三鈷宝剣・九峯宝鈴 (神功皇后御鈴) 有志八幡講
- 雨宝童子立像 大聖院
- 役行者倚像 金剛峯寺女人堂
- 三地所明神像 西南院
- 影向明神像 正智院
- 道範阿闍梨像 正智院
- 丹生明神像 竜光院
- 高野曼荼羅図 (弘法大師丹生高野明神像) 西禅院
- 高野草創図 親王院



高野草創図 親王院



高野山絵図 (部分・上皇参詣の図) 持明院

- 理源大師聖宝御影 宝寿院
- 熊野曼荼羅図 西南院
- 一心十界図 遍照光院
- 天河弁才天像 親王院

※は作品保護のため、展示期間を10月31日(土)～11月15日(日)とさせていただきます。

収蔵品の紹介 67

いっしんじゅっかいず  
一心十界図

遍照光院

一幅 絹本着色 室町時代

縦168.0cm 横121.3cm



十界とは、迷いも悟りも含めたすべての境地を十種に分けたもので、苦しみに満ちた迷いの世界である六

道（六凡とも。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）と悟りの世界である四聖（声聞・縁覚・菩薩・仏）で構成されています。六道は有名ですが四聖は主に天台の教学で説かれ、また修験道では十界修行という、山岳修行により地獄界から仏界までを下から順に体感することで即身成仏を目指します。

本図は山中の「心」字を中心にマンガのふきだしのように区切られた十界が描かれています。「心」から伸びる光線のような筋をよく見ると、女性を含む小さな人物が上と下では対照的な表現で描かれています。我々の生きる人界から、信仰心や日頃の心がけ、行いによって成仏

できる、あるいは苦しみの世界に堕ちてしまう、という事を説いているのだと思われまます。

熊野比丘尼たちが各地で絵解きしたという「熊野観心十界図」は和歌山県立博物館などで見ることができますが、こちらは「心」字を中心に十界を描き、上部に「老いの坂」と呼ばれる、人が生まれてから老いてゆくまでを順に描いたアーチ状の坂があるのが特徴的です。本図には坂がなく、このような構成の図は類例が少ないようで、他に室町時代のものが神奈川県の長善寺に伝わっていますが、十界の配置や絵柄は随分異なります。

本図には「恵心十界図」の銘があり、法然上人（一一三三～一二二一、浄土宗開祖）寄付とあります。恵心僧都源信（九四二～一〇一七）は天台僧で、地獄・極楽について説く『往生要集』の著者として知られます。制作は室町時代とみられるため、銘の由来とは矛盾しますが、浄土信仰の盛んだった往生院の後身である遍照光院に伝わることから高野山における浄土信仰の歴史の一端をうかがうことができ、さらに「熊野観心十界図」や修験道との関係など、高野山だけでなく紀伊半島の山々を取り巻く複雑な信仰形態について考えさせられる遺品です。 (F)

ワークショップ

山岳修行の装束  
(山伏装束) を  
知ろう!

霊宝館では、秋期企画展の開催にあわせ、山岳修行者の装束（山伏装束）の体験説明会を行います。日本の山岳修行は密教とも深く関わっています。装束・着用の仕方も特殊で、装束一つひとつには密教的な意味づけがされています。直接、見て（着て）山岳修行の世界に触れてみてください。

日時：11月2日（月）・3日（火）

午前の部10時／午後の部14時

（1回約40分）

場所：高野山霊宝館 迎賓館（無料）

※装束着用の希望者は、当日に会場にてお申し出ください（1回につき先着2名）。また、動きやすい服装（スカート不可）と白のTシャツ、靴下をご用意ください。

※サイズの都合にてお断りする場合があります。

お問い合わせ

高野山霊宝館内「もみじ祭」係  
電話 0736-56-2029

高野山の文化

高野山の明神信仰

前奥之院いひ維那 日野西 眞定

(一) 高野山の丹生・高野両明神の発生

(4) 檢校乗如の行跡

ここで、乗如の行跡をまとめておきたい。正智院には、檢校時代の姿を描いた軸(縦一〇四センチ・幅四十二センチ、絹本着色)があるので、まずこれを紹介しておく。なお高野大明神

に従う百二十伴神を求めて、鉄鉢を持つて都や田舎を廻つて行をし、また関係深い十二王子社を求め、住侶の信施を受けるといふ行もおこなっている。高野大明神に対する行者でもあった。その行跡は『紀伊統風土記』(四・



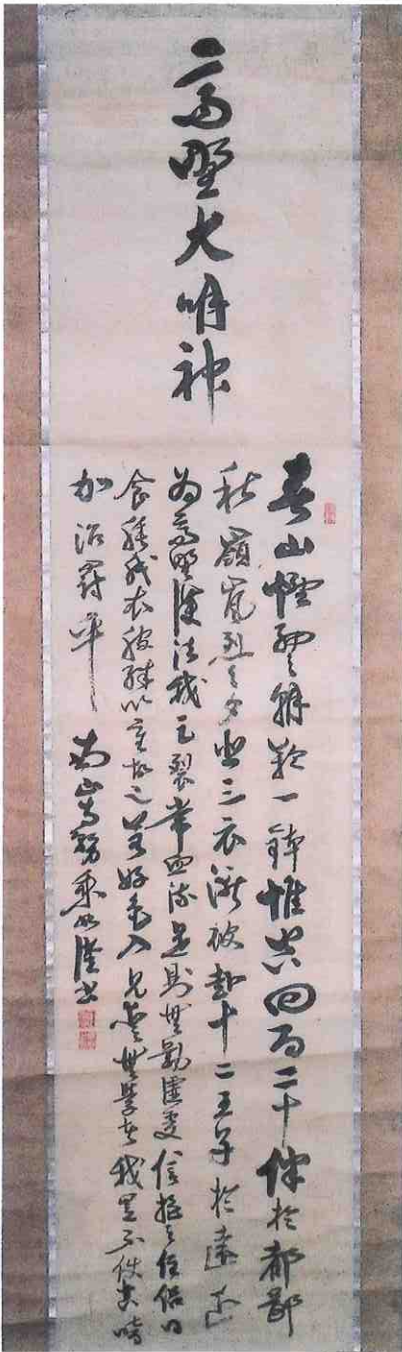
乗如の像 軸裏に「第三十九世乗如尊像」と墨書されている。正智院の第三十九世とされる。前官時代のお姿である。

七四五頁)「山主檢校次第」の第三百五十八世寺檢校乗如の項、及び「乗如自伝」に詳しく記してある。房号恵充房、院号宝性院である。備後の国安那郡徳田の人、年十三歳の時、宝泉寺(現岡山市大多羅町)の観如に従つて得度し、二十歳の時高野山に登り、覚道阿闍梨(一七三五〜一八一〇)の弟子となり、密教を学んだ。その後再び宝性院に帰住し師観如の跡を継いだ。が、同十一年高野山聖善院に迎えられ、さらに正智院に転じ、集議衆となった。五十六歳で碩学、文政四年(一八二二)に門主職となり、江戸二本榎高野寺に滞在すること七年間、この時多くのすぐれた人々と交遊した。また詩文にも長じ多くの文化人とも交わった。同十年(一八二七)十二月檢校に任ぜられ、治山三年間、同十三年十二月に職を辞した。

その間、文政十一年二月二十四日に孝恭院殿(徳川家墓)の五十回忌大曼荼羅供を行ったとある。これは「蓮花院過去帳(高野聖派觸頭、特に將軍徳川家とは法縁が深く、徳川家康から「徳」の字を戴き、江戸時代には「大徳院」と称していた)には「孝教院殿贈正二位内大臣」とあり、第十代將軍として認められているが、これを認めない説もあるようである。但し、法名の字の一字ぐらいの違いはよくあることで、これは大した問題にはならない。同年六月二十日には、最樹院殿一周忌の大曼供の御導師を乗如が勤め、同十二年二月二十日三回忌を行ったとある。前記「蓮花院過去帳」の『華族各家過去帳』(明治時代に整理をしたもの)には、「二橋御殿(二橋家)の中に「最樹院殿贈太政大臣性體登徹大居士」とあり、これが徳川治済である。

〈眞雅僧正に大師号を賜わる〉

次に同十一年六月二十六日には「眞雅僧正に法光大師ノ諡号(贈り名)ヲ賜ウ勅書ヲ賜リ」、その勅書を、奥之院僧正廟所遙拝所大坂に於て、寺務乗如が朝廷からの御伝使、御副使等の前で奉読したとある。「大坂」と小文字



乗如の高野大明神を講る軸「南山寺務」とあり、檢校時代の書と思われる。正智院蔵。

で書かれている場所は、奥之院中の橋を渡り終わったところにある坂のことである。中の橋脇（奥之院に向かつて左手）には、筆者が『高野山民俗誌「奥の院編」』『中の橋』で取り上げているが、嵯峨天皇と実慧の供養塔も有った。特に嵯峨天皇の供養塔は、『持明院蔵高野山絵図』には、五輪塔で、向かつて右に「嵯峨天王御墓所」、同左に「弘安二歳四月朔日」と記してある。鎌倉時代初期弘安二年（一二七九）に建立されたものであるが、明治十七年（一八八四）の『高野山略図』以降は行方不明となっている。

ここで問題になるのは、何故中の橋に、これら嵯峨天皇・実慧・真雅達、高野山及び弘法大師空海にとつて重要な弟子達の供養廟や塔が建立されたのかということであるが、これより内は御入定されておられます大師に対し遠慮する風習が、鎌倉時代初期頃までに

は有ったように考えられる。一方、山内に住する僧は、当然次々に往生者が出たが、それは現金剛峯寺が建立されている後方の山中には「葬ガ谷」と呼ばれる場所があり、真然僧正をはじめとする僧達、さらに例えば祈親上人は釈迦文院の本堂下に葬られたという伝承があるが、各住坊または、その近くに葬られたものと思われる。『紀伊統風土記』（五・三五〇頁）の「院使」の項目によると、文政十一年六月二十六日、真雅僧正に法光大師号を贈る勅書を奉じて来たのは、勅書御伝使嵯峨御所井関兵部卿、副使野路井空、御室御所の御添使長尾宮内卿、小幡伊勢介であった。同日に勅書を青巖寺に賜わった。翌二十七日に、奥之院真雅僧正廟前に両使、さらに金剛峯寺側からは両門主の代りに碩学の二人が参向し、その勅書を檢校の乗如が奉読した。その後勅書は御影堂宝庫に

蔵められたとある。この大師号を賜わったことも、乗如達の働きが有ったものと考えられる。〈その他の事項〉  
文政十一年十一月九日、後桃園院五十回御國忌を行ってゐる。『日並記』には、同九月七日の条に、「後桃園院尊儀五十回御忌御法事請定順達致シ候事」とあるだけである。  
同十二年五月八日、巖有院殿の百五十回忌を行ってゐる。四代將軍徳川家綱の法事である。『日並記』によると、將軍家の位牌は何時もは、金剛峯寺に祀られているが、これを御逮夜に大塔に迎え、法要が終わるとまた返している。  
同年十一月三日には、後桜町院尊儀の十七回忌を行ってゐる。  
同十三年三月十二日には、寛平法皇の七百五十回忌を金堂に於て、大衆皆

参（全員参加する）して曼荼羅供を行つてゐるが、乗如はその導師を勤めたとある。寛平法皇は宇多天皇（八六七〜九三二）のことで、後に出家して「法皇」となったが、法皇のはじまりの方といわれている。仏教に対する信仰が厚く、特に弘法大師空海の後を継ぎ、金剛峯寺建立に生涯を捧げた真然僧正（八〇四〜八九一）に協力を惜しまなかつた。法皇となり御所を御室御所としたが、後に仁和寺となり、天皇家の仏教の根拠地の役を果たすことになった。『日並記』（文政十三年三月十一日）にも、京都御室御所に金剛峯寺から慈光院（谷上・学侶上通）を使として、この法事を行う了解を得て帰つて来たという記述がある。導師となつた乗如も、この歴史を重く感じて行つたものと思われる。

〈西塔再建と乗如〉

『紀伊統風土記』（五・総分・五十頁）の「西塔」によると、文化十年（一一三三）に行人方金光院（一心院谷・行人方通）真尊と学侶方正智院（谷上・学侶方上通）乗如が協力して、西塔再建の願いを幕府に願ひ出て、將軍の許可を得て、同十一年から始め天保四年（一八三三）に落慶供養したとある。江戸時代でも、一山の大切な行事は、学侶・行人の両方の許可を必要

としたのである。ことの成り行きから考えると、正智院住職である乗如の方から声を掛けたものと思われる。

本書学侶方の「西塔」(四・七十二頁〜七十六頁)の記述によると、これは第五度目の再建に当たる。寛永七年(一六三〇)十月七日丑ノ尅(午前二時)、雷が大塔に落ち、豪雨が降り注ぎ、大塔の崩れる音は、山の崩れるような大きな音がして、猛火がほとばしり出た。この時、金堂・御影堂・西塔



嵯峨天皇の供養塔 持明院蔵高野山絵図より

等壇上(場)の諸堂は、みな灰燼となつてしまつたとある。しかし、大塔・金堂等は間もなく再建されたが、西塔だけは、「塔基のみ焦土に埋まり、仮堂も又朽損す」という姿であつた。

正智院は、谷上にあり西塔に近く、そのためにこの姿がよく見受けられた点もあり、同院蔵『西塔再興来由略』(文化五年正智院覚道記)によると、天明九年(一七八九)の春、同院英寂前官(三十七世(一七一三〜九四))が、西塔再建の本願主となり、寛政六年(一七九四)までに自己基金に加えるに、勧進した金を合わせて一千両を基金として提供し、さらにその志を継いだ覚道(第三十八世(一七三五〜一八一〇))は、文化二年(一八〇五)に自力で西塔建立の願旨に対し幕府の公許を受けることが出来た。しかし、年老いてその任に堪えられなくなったので、同院第三十九世乗如に、切にこの志を継ぐことを依頼した。乗如は、同十年(一八一三)からは、弟子の中



西塔前に建立された石造常夜燈

の良心を抜擢して土木関係の全般を管理させ、相い共に相談し苦心惨憺して二十年余りかかり、天保五年(一八三四)やっと完成することが出来た。同年三月二十三日、前官乗如は本尊の開眼の法を修し、棟梁の上棟の儀式があり、翌二十四日檢校増源が導師となり、落慶法要を行ったとある。

最後に、「今度の再造は、御修理の用途一銭半粒をも用いず(金剛峯寺が使う毎年の寺領下の社寺に対する修理料)、唯正智院一己自力の経営なり、自余伽藍の例格と異なれり」と結んである。なお、塔前には、高さ約二メートル四十三センチの石燈籠が二基建立されている。銘文に、正面常夜燈(大字)、(左)紀州上那賀郡名手荘 華岡 隋賢、(裏) 執次 正智院良心、(右) 天保三年壬辰三月之レヲ建ツ、と刻んである。良心は麻酔薬を開発した華岡青洲家の出身である。同家は、仏縁もあり、信仰も厚かつたと思われる。

# 高野山の名鐘

## 其の15 清浄心院の鐘

### 梵鐘銘文

清浄心院者距大塔十六町在壑道北谷之名従本院之名稱清浄心院谷北峨々高山花石奇樹相雜最有雅趣本尊弘法大師御像者聞說承和二年三月高祖大慈悲之餘情為令未資慰追慕之心且薄福衆生得瞻禮之益當入定之前日親所雕造故稱廿日大師矣先師堯榮尊師再建鐘樓未及鑄梵鐘依而

承先師之志命冶工令鑄造鐘焉銘曰洪鐘一打聲遍十方三界震吼六道息苦乾坤清浄心霧解散四海和平法界利樂吉昭和四十六辛亥年弥生二日高野山清浄心院幻住善教(花押)三重県紀伊長島町功徳主愛宕一心教會京都本町高橋鑄工場謹鑄

連載



左手前「傘桜」の幹と鐘楼

清浄心院は一の橋のたもとにあり、奥之院に最も近い寺院です。清浄心院という寺号は朝廷の命名になりますが、春には山桜やしだれ桜が清浄心院を包み込むように一の橋までの道を彩り、まさに心が清らかなるような眺めです。山門をくぐる

と「傘桜」と呼ばれる、豊臣秀吉が花見を催したと伝えられる山桜の老木もあります。

その「傘桜」のそばに鐘楼堂があります。先人の研究によると、戦前までは文化元年（一八〇四）八月二十一日と刻まれた鐘があったようです。しかしながら、戦時中に恐らく金属供出されたものか、失われてしまいました。

現在の鐘は昭和四十六年（一九七

一）に铸造されたものです。通高は一三〇センチほどで、口径は七三センチで厚さが約八センチです。銘文には清浄心院のある場所や本尊について、またこの鐘を铸造した経緯と住職の偈、寄進者と铸造者が陽刻されています。清浄心院の場所や、本尊についての銘文は、ほぼ『紀伊続風土記』にある文面で、清浄心院のあるあたりは、この寺院名より清浄心院谷と呼ばれるっており、険しい山にさまざまな花や草木が茂る、趣ある場所であると述べられています。ご本尊は廿日大師とよばれている弘法大師像です。このお像は、弘法大師が奥之院にご入定される前日に、自ら刻まれたものと伝えられています。現在でも弘法大師ご入定の前

日、旧暦三月二十日には盛大な法要が営まれ、多くの方が参拝されています。銘文にある先師堯榮とは水原堯榮師のことで、鐘楼堂の建立をされましたが、梵鐘の铸造までは及ばず、その志を受けて、当時の住職であられた中川善教師がこの鐘を铸造されたことが記されています。水原堯榮師は昭和二十二年から清浄心院の住職を務められ、昭和四十年にご遷化されました。その間、昭和三十三年には金剛峯寺座主に就任されておられます。水原堯榮師のご遷化の後に弟子の中川善教師が清浄心院の住職となられました。中川善教師は高名な学僧でもあられ、その教えを受けられた多くの方々、現在の高野山



真言宗を支えておられます。施主の愛宕一心教会の方々も、清浄心院には毎年ご参拝されておられます。偈にあるように、人々の心の迷いを払い、平和と利樂を願って、一打、一打、丁寧に撞かれる鐘の音は、朝夕に清浄心院の周辺にやさしく響いています。

(K)

# 高野山の天狗伝説

日本の各地には天狗の伝説が比較的多く伝わっています。京都の愛宕太郎坊、鞍馬山僧正坊、奈良は大峯前鬼坊、滋賀は比良山次郎坊、飯綱三郎、讃岐は白峯相模坊、九州は彦山豊前坊、相模の大山伯耆坊などを、いつの頃からか天狗の代表として八天狗と呼んでいます。これらの天狗の姿を見ますと、

鼻が長く、顔が鳥のような姿で、両脇に羽をつけているのが特徴です。この姿の基本となっているのは、修験道の山伏や僧侶に近い姿であることがわかります。

しかし、天狗自体の正体となると、分かつているようではわからないのではないのでしょうか。現在、天狗の起源として解釈されているものの中から、次の二つをあげてみましょう。

- ・里から離れ山に住んでいた山人
- ・魔界に入った僧侶や山伏

古来、深山において不思議な自然現象が起ると、天狗の仕業だとする場合があり、里人は、山には天狗がいるとして恐れました。しかしその実体は、天狗は都市や里から離れ、非農耕にて

暮らしていた山人であったというものです。また修験道の開祖とされる役行者は、険しい岩山や深山などにこもって修行し、特殊な験力を備えていたとすることから、これが後に、山中で修行をする山伏と天狗とを同一視するようになったともみなされています。

では山岳信仰の霊場、高野山ではどういった天狗がいたのでしょうか。知られているのは覚海尊師、毘張尊房、妙音房、高林房などがあげられます。これらには僧侶が天狗となったものと、逆に天狗が僧侶になった場合があります。覚海尊師は自ら天狗となった人物で、毘張尊房は寺院を火災から護ることを誓った天狗とされています。そして、どちらともわからないのが、弁天岳の大杉に棲んでいたという妙音房、谷上(宝寿院の北)の山林に棲んでいた高林房などです。

## ● 覚海尊師(一一四一〜一二三三)

覚海さんは自ら魔界に入って天狗となり、高野山を護ったといわれる人物です。その覚海さんには「悉知前七生



花王院より複製  
覚海尊師像  
【密教研究】

昇天した後、高野山を護り、悪があればこれを正すべく、天狗となって今も見張っているという事です。現在、覚海さんの社祠は霊宝館の西の鬱蒼とした「遍照が峯」の一角にあって、昇天したという杉の木は増福院の門前にあります。

## ● 毘張尊房

毘張尊房は鼻長房とも記し、高野山の金剛三昧院を守護している天狗です。江戸時代は明暦(一六五五〜五七)の頃の話ですが、時の金剛三昧院住職が法会に出かけると、にわか雨が降ってきました。蓑笠を持っていなかったので住職が困っていると、雨が降っているのに衣はいつこうに濡れませぬ。不思議に思っ振り返ると、得体の知れぬ者が自らの羽を払って頭の上を覆っていました。住職が「汝は何者か」と問いただすと、魔界に暮らす者だといいます。自分は魔界の苦しみから免れたいので、救いを求めて住職を師として仕えたいとうったえます。そこで住職は苦しみから逃れる秘密の印明を授けてやり、魔界の者はこの恩に報いるべく寺を守護し、永く火災から

因縁」という、弘法大師から自分の前世の因縁を覚えてもらった話があります。それによると、覚海さんの前世で一番最初は、小さなハマグリだったそうです。ハマグリの時に、童子の悪戯によって天王寺のお堂の前に置かれてしまいます。そこでありがたいお経を聴いて、その功德を得て、次に荷物を運ぶ牛に生まれ変わります。牛の時に大般若経を書写するための紙を背負った功德で馬に生まれ変わります。馬の時に熊野詣での参詣人を乗せた功德で神仏の前で火をともし人間として生まれます。さらに次の世で弘法大師廟で密教修法に関わる給仕者となり、僧侶として徳の高い地位である高野山第三十七世検校となったということです。時に健保五年(一一二七)、覚海さん七十六歳でした。そして最後の第七生では、中門の扉を羽にして八十二歳で





毘張尊師像 金剛三昧院

護ることを誓ったといひます。そうして魔界の者を毘張房と称し、金剛三昧院では小祠を建てて祀つたと伝えられ、現在、金剛三昧院の庭先には毘張房昇天の杉と伝えられる六本杉があります。霊宝館においても、月に一度の法会には「南無毘張尊師」とお唱えして火災除けを祈願しており、今にその信仰は伝えられています。

では次に、弘法大師にまつわる天狗



天狗降伏事 高野大師行状図画 地藏院  
修行の邪魔をした天狗たちと弘法大師空海とが問答する場面を描いています。「この地に勝手に寺院を建てられては困る」などと交渉しているようにも思えます。天狗側の中心人物が衣と袈裟を着けている天狗として描かれているのも注目です。

一般的な天狗のイメージは、人に取り憑いたり仏道の修行を妨げ、悪事をはたらく魔物とされています。しかし、高野山の天狗はその逆で、寺院を守護する役割を担っていることがわかりました。

はどのようなものだったのでしょうか。弘法大師の伝記である『高野大師行状図画』（地藏院本）には、土佐の室戸にある金剛頂寺で、夜ごと修行の邪魔をする天狗の話が載せられています。大師は天狗達と問答して、以後、邪魔をしないと約束を取り付けたというものです。ここで登場する天狗達は、この地を生活圏にしていた先住民で、地主神の祭祀者ではなかったかと思いたくなります。それは弘法大師が修行の地を求めて高野山へ入った時に、筋骨太く赤黒い身体で身の丈八尺もある狩人（後の狩場明神）に遇って

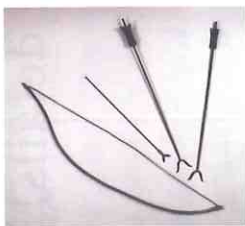
高野山へと導かれた話と、どこか通じるところがあります。狩人は山の先住民で、二メートルを越える大男であ

### 企画展「山岳信仰と高野山」

#### 出品中の鉄矢（弓箭）

##### 天狗吉久の鉄矢

高野山有志八幡講には、鉄製の弓箭が御神器の一部として伝わっています。鉄矢は三本あって、そのうちの二本に「天狗吉久鍛冶平太作」という銘文が刻まれています。天狗の名が付く鍛冶師では、桃山から江戸時代にかけて活躍した熊野の天狗鍛冶が知られています。その系列に権太吉久という矢の根造りの名人がいて、両者が同名であることから同じ人物である可能性もあります。



弓箭 有志八幡講十八箇院  
弓には「八幡大菩薩天正五年（1577）八月十五日」と刻まれています。



鉄矢部分  
「天狗吉久鍛冶平太作」一部判読しづらい部分もあります。



熊野の大丹倉（熊野市育生町） 2009.9 撮影  
高さ300m、幅500mにも及ぶとされる大絶壁で、昔から修験の行場だった場所として知られています。この頂上には天狗鍛冶発祥の地として、近藤兵衛の屋敷跡が遺っています。

つたとの伝説は、まさしく天狗そのものをイメージさせてくれるに足るものがあります。

「天狗」の名を冠している理由は、吉久に鍛冶の技術を授けたのが、里人から「天狗さま」と呼ばれ畏怖されていた近藤兵衛という人だったからです。吉久の師である兵衛は、武士でありながら熊野の大丹倉の修行場で修験の荒行をしつつ、鬼気として鍛冶を行っていました。その姿は、里人からすると天狗とみなすには充分だったようです。こうしたことから兵衛の弟子は、「天狗」という名前を引き継ぐようになったとのこと

(M)

## コラム

## 「神は細部に宿る」(God is in details)

## 第一章

「神は細部に宿る」という言葉を聞かれたことがあるでしょうか？ 高野山風に言うと「お大師さまは細部に御座します」といったところでしょうか。これは、芸術の世界でよく言われる言葉なのですが、誰の言葉なのかは実はよく分かっていません。ドイツの美術史家だという説もあれば、同じくドイツの建築家、またはイギリスの美術史家だという説もあります。

では、これはどういった意味に解釈できるのででしょうか。実は、この解釈にも色々あって、人によって解釈の仕方が違うようです。以下にその例を挙げてみましょう。



胸部X線透過写真

運慶作 国宝・八大童子立像のうち制多伽童子立像 金剛峯寺

● 芸術作品で、細部にまでとことんこだわって手を抜かずに創られたものは美しい。そうであってこそ神の宿ったような作品ができる。

● 作品の中で細部にこだわり抜き「神が細部に宿った」としても、最終的には全体に統合されて美しくなければならぬ。細部が浮いてしまつてはならない。

● 細部を意識せずに創られたものであっても、そこにこそ、その作者の本質や個性が表れ、美しさを見出すことが出来る。

● 全体の美しさは、細部の美の追求によってもたらされる。といったものです。西洋でよく言われる言葉だけあって哲学的な解釈が多いようです。皆さんはどのように解釈されるでしょうか？

それぞれの解釈の仕方については措きまして、今回は、三つ目に挙げた解釈に注目したいと思います。

「細部に意識を置かずには作られたものであっても、そこにこそ、作者の本質や個性が表れる。」

この考え方は、芸術の世界において非常に重要なことなのです。少し、

心に留めておいて下さい。

少し話が逸れますが、霊宝館で勤務していますと、「運慶作や快慶作と書いてありましたが、何故分かるのですか？」という質問をされることがあります。作者を決定するには、色々な方法がありますが、ここでは、少しだけ挙げたいと思います。

まず、一つ目は、「伝承」です。「これは、昔から運慶の作だと言われ伝えられてきたものだ」というものです。しかし、これは途中で付加された伝説のようなものが多く、全てを信じるわけにはいきません。

二つ目は、「文献史料」です。その仏像と一緒に伝えられてきた文書に運慶作と書かれていれば、信頼性は高くなります。しかし、作爲的にその像の価値を高めるために伝説を付け加えることもあるので、その他の文献も利用しながら考えるということが必要です。同時代の史料でなければ、信頼性は更に低くなってしまいます。金剛峯寺蔵の国宝「八大童子立像」は、運慶の作であることが、後世の文献に記されています。三つ目は、「銘文」です。像自体



足納銘

快慶作 重文・四天王立像のうち広目天立像 金剛峯寺



胎内銘

快慶作 重文・孔雀明王坐像 金剛峯寺

に作者の名前が記されているのであれば、信頼性は非常に高くなります。しかしこれも、後の時代に書かれたのであれば、慎重に調べなければなりません。金剛峯寺蔵・快慶作の「孔雀明王坐像」は胎内（後世の書き直し）に、「四天王立像」は足納（当初）に銘文がそれぞれ記されています。

四つ目は、「納入品」です。仏像が作られた時に、作った理由や人物の名前が記された文書や、特徴付ける品、遺品などが納められている場合があります。これは、同時代のものであれば、ほぼ信頼してよいでしょう。納入品は、解体修理の時に見付かることが多いのですが、修理の必要が無いものに関しては、X線透過撮影（レントゲン）を行って像の胎内を観察します。八大童子立像は、この方法によって運慶特有の納入品が胎内にあることが分かり、運慶作であることが裏付けられました。

五つ目は、「作風」です。運慶作と確実に分かっている仏像があれば、それと比較して、運慶の特徴があるのかないのか、似ているのか似ていないのかということ調べます。作風鑑定はその作者の個性を抽出するという言い方もできます。

この他にも色々あるのですが、

主に以上のようなことを材料に総合的に判断していくのです。

この中で、美術史特有の方法が五つ目の「作風」です。明治時代に入ってから、東京美術学校（現在の東京藝術大学）設立に携わった、岡倉天心やアメリカ人東洋美術研究家のフェノロサ達によって、「日本美術史」という分野が確立されるのですが、それ以来蓄積されてきた研究成果を元に「〇〇の作品にはこういう特徴がある。この像にも同じ特徴があるので、同じ作者だ」という判断が下されます。しかし、この作風論も絶対のものではなく、違う作者であつても非常に似通った作風を持っていることもあります。例えば、運慶や快慶に代表される慶派という仏師の系統は、大きくは似通った作風を持っています。その中で、細かく分類していくのですが、どうしても分類しきれないものもあります。

では、そのような時はどうすればよいのでしょうか。一人の仏像研究者が画期的な一つの方法を試みましたが。いったいどのような方法だと思えますか？紙面が尽きましたので、今回はここまでにしましょう。次回、その方法についてご紹介したいと思います。

(T)

霊宝館の庭園

ウバメガシ・姥芽欒・馬目欒・ばべ

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

名前を問われることの多い植物の一つが、霊宝館の前庭から道路を隔てて北東すぐの所に見える、高野山大師教会本部・高野山教化研修道場の生け垣となっている木です。

ブナ科・コナラ属の常緑小中木のウバメガシ、自生分布は神奈川県以西の太平洋側、四国、九州、中国（台湾・大陸）だそうです。腐植土の少ない日当たりのよい岩礫地、特に沿海の岩地に多く自生します。

高野山では自生種はみつかっていませんが、高野町の筒香という在所には自生だという林があります。

山野にあつては大小の枝を広げて自由奔放に、里や街では淑やかで従順、整枝・剪定にも適応、公害・病害虫にも強いので、生け垣・庭木などに重宝されています。

自生種の幹は備長炭（白炭）の原木となることは周知のこと、往時は黒炭材、日常の薪にも。たいていの樹木は春から初夏に花をつけ、その秋には果実が熟しますが、この木は初夏に雄花と雌花をつけ、翌年の秋に堅果（どんぐり）が実（稔）のりします。

高野山との関係の一つは、昭和四十一年（一九六六年）九月十日にウバメガシが公募により和歌山県の「県の木」に選定された際にコウヤマキとの競争があつたことです。

ウバメガシという和名は、淡褐色の



高野山大師協会本部高野山教化研修道場の生け垣



自生種の幹と葉枝



堅果（どんぐり）  
（和歌山県林業試験場の秦野氏提供）

新芽の煮汁に鉄分を加えて、歯を黒く染める「御歯黒」に用いられたことによるといいます。字は姥芽（目）欒を当てています。

この煎液で塩化第一鉄を媒染剤として綿布が黒紫に染まりました。

別称・方言名には、用途による姥芽（目）の木・灰汁柴、最適の自生地による磯欒・浜欒、葉の形によるのではと思われる馬目欒；うまめ・うましば、高野山周辺を含めた方言名には、ばべ・ばべのき・ばべしばなどがあります。

この木に米国の植物学者で欧州の植物にも精通したAsa Grayという人が、ペリー提督の二度の浦賀来航の際、艦隊の人達に依頼して採集してもらった標本をもとに、地中海地方やカナリア諸島に自生するモクセイ科の「*Phillyrea latifolia* L.」という常緑樹に似ているコナラ属」という意味の学名をつけています。この両樹は、大阪府立大学の副島顕子先生から、いただいた写真からも、その枝葉が、よく似ていることが判りました。

利用案内

開館時間

11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

休館日

年末年始のみ

拝観料

大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

専用駐車場あり

時事

「高野山の名宝」展終了

七月十八日から九月二十七日まで霊宝館において開催の「高野山の名宝」展が、二万二千人の拝観者を迎えて無事終了しました。

台風十八号通過

十月八日未明、台風十八号が日本列島に上陸しました。その影響で七日深夜から八日明け方にかけて、高野山でも暴風雨にみまわれましたが、幸い霊宝館施設及び山内指定建造物に被害はありませんでした。